

〔研究会報告〕

第5回国際アジア学会議(The Fifth International Convention of Asia Scholars: ICAS5) 報告

塩崎 悠輝 (同志社大学大学院)

塩崎 (久志本) 裕子 (東京外国語大学大学院)

2007年8月2日から5日の4日間、第5回国際アジア学会議(ICAS5)がクアラルンプール・コンベンションセンター(KLCC)にて開催された。ICAS (アイカス) はアジアに関するあらゆる分野の研究者の集う国際会議であり、1998年ライデンにて初めて開催されて以来、今回の第5回までを総計すると参加者約5000人、発表数約4000件を超えるアジア最大規模の学術会議となっている。2001年のICAS2はベルリンで開かれたが、第3回以降開催地はアジアへと移り、2003年のICAS3はシンガポール、2005年のICAS4は上海、そして今回ICAS5がクアラルンプールで開催されるに至った。ICASの事務局はライデン大学国際アジア研究所(IIAS)にあり、マレーシアでの開催に当たってはマレーシア国民大学(UKM)のInstitute of Occidental Studies(IKON)とInstitute of the Malay World and Civilization(ATMA)がホストとなった。

ICAS5には40カ国から1600人の発表者が集まり、研究機関あるいは団体が主催するパネル125件、3~4件の個人発表をテーマごとに集めたグループ・パネル225件が組織された。一つのパネルの持ち時間は2時間で、一日に4つの時間枠が設けられるのだが、一つの時間枠には最大24のパネルが同時進行するため、興味のあるパネルが重なってしまうこともやむをえない。また、直前になってのキャンセルが相次ぎ、本来4人で構成されるパネルの発表者が当日になって1人しか来ないことが判明したり、パネル自体がキャンセルされたりというトラブルも相次いだ。

今回の参加者で最も多かったのはやはりマレーシアだが、日本からの発表者は75人¹と、中国、オーストラリアに続いて第4位、7%を占めていた。JAMS会員からも、原不二夫会員、吉村眞子会員、塩崎悠輝、塩崎裕子らが発表を行った他、多数がオブザーバーとして参加した。

以下では報告者が参加したパネルの中でマレーシアに関する研究を含むものいくつかについて記述したい。8月2日午後に行われたシンガポール国立大学

¹ 発表者一覧の名前から報告者が判断した合計数。

(NUS) のパネル “Religion and the State in Asia” では、現代のシンガポールにおける宗教と行政の関係する様々な事例を取り上げながら、宗教と国家の関係のあり方が論じられた。Lily Kong はインターネットを用いたトランスナショナルな宗教活動に関する報告を行い、インターネット利用者が国家としてのシンガポールよりもトランスナショナルな宗教コミュニティに帰属意識を持つようになっていく可能性について論じ、シンガポール政府のとりうるいくつかの対策を挙げた。Tan Tai Yong は、シンガポール在住のシーク教徒コミュニティに関する研究を行っており、およそ 1 万 2000 人のシーク教徒（パンジャブ語を母語とすることでは共通しているが、先祖の出身地は異なる）が、政府に対する代表機関である Sikh Advisory Board で意見を集約しつつ、Sikh Education Foundation、Sikh Resource Panel 等を通して特にコミュニティのための教育に力を注ぎ、アイデンティティの維持に努力していることについて報告した。

8 月 3 日午後に行われた河野毅氏（政策研究大学院大学）が議長を務めるパネル “Transformations of Islamic Education Institutions in Southeast Asia” では、河野氏が UKM 政治学教授の Mohd Kamarulnizam Abdullah 氏、インドネシアの Julkipli Wadi 氏をメンバーに含んで行っている共同研究の成果が報告された。まず河野氏がインドネシアにおいて見られる各種のイスラーム勢力をその主張に基づいて「近代派」「伝統派」「過激派」といったカテゴリーに分類し、この分類に沿って多様なイスラーム教育機関を分け、全体像を説明した。続いて Kamarulnizam 氏がマレーシアのイスラーム教育機関について、歴史的背景と 9.11 後の展開として宗教学校の国立学校化が進んでいる様相を明らかにした。最後に Julkipli 氏がインドネシアのいくつかのプサントレンで行ったアンケート調査をもとにプサントレンの学生の思想的傾向について報告を行った。近年のイスラームへの関心の高まりを反映してか、フロアは 20 人を越える参加者で埋められ、多数の質問、コメントが寄せられた。

報告者（塩崎裕子）は 8 月 4 日午前のパネル “Civil Society” において “Nationalization of Islamic Religious School in Malaysia” というタイトルの発表を行った。報告者が 2006 年 3 月からクダ州のある宗教中等学校 (Sekolah Menengah Agama) において行っているフィールド調査に基づき、もとは地域社会の寄付によって設立された宗教中等学校が 2005 年以降、教育省のもとに管理・運営される政府補助学校に移行している現象について、その中に見られる政府側と宗教学校側の駆け引きの様相を論じた。このパネルはもともと 4 人の発表者で構成されていたが当日 2 名が欠席し、報告者の他は、マニラ大学で心理学の教鞭をとっている Michelle Gedang Ong 氏が、子どもの社会参加に関するフィリピンの NGO および政府の取り組みについて発表を行った。

報告者(塩崎悠輝)は8月4日午前のパネル“Religion in Southeast Asia(Panel I)”において“**The State and Ulama in Contemporary Malaysia**”というタイトルの発表を行った。伝統的にムスリム社会の教育、宗教儀礼、モラルの維持、統治者への助言、司法等の担い手であったウラマーのネットワークが、近代国家としてのマレーシアの中で、行政に取り込まれて官僚化し、伝統的な権威を失っていく一方で、マレーシア・イスラーム党(PAS)が州政権を担うクランタン州で見られるように、新たな「ウラマーの指導」を掲げ、宗教学校と州行政によって編成された地域コミュニティ(ハラカ)へのウラマーの派遣によって、ウラマーが現代社会においても大きな役割を果たそうとする試みも見られる現状が報告された。同パネルにおいては、他に2名の報告があった。フランス国際調査研究センター(CERI)のJuliette Van Wassenhove氏は、インターネット・ニュースに投稿されたイスラーム・ハドハリ(文明的イスラーム)に関する投書を分析し、中間層のムスリム・マレー人は、近代合理主義的なイスラーム解釈を好む傾向が強いと報告した。京都大学の北村由美氏は、現代インドネシアにおける儒教コミュニティに関する研究を行っており、1965年、スカルノ政権末期に6番目の公式宗教として認められた儒教が、反共反中国政策をとるスハルト政権下で公認を取り消され、インドネシア儒教最高評議会(MATAKIN)を中心にムスリム知識人の支援も得つつ、再公認を目指して多様な戦術で働きかけを続け、2006年に再びインドネシア政府の公認を得るまでの過程について報告した。

ICAS5の全体の感想として、あまりに規模が大きすぎて組織しきれていないという実感があったのは否めない。個人発表を集めたパネルではまったく面識のない発表者が集められるので、新しい研究者との出会いという大きな意義を持つ一方で、断りなくキャンセルがでたり、共通の議論が困難であったりという面もあった。これに対して集団で一つのパネルを構成したものはこうした欠点を防ぎ、多様な背景を持つ研究者との充実した議論が成立していた。これらの点を考慮して有効活用すれば、有意義たりえる会議であった。